

演習 山田晴通

コミュニケーション学部コミュニケーション学科

21c1041 横田朝陽

日本サッカーが海外サッカーを追い抜くためには。

～国内と海外の育成年代を比較して～

1. はじめに

現在、自分は地元の小学校でサッカーのコーチをしている。今までは自分自身がプレーヤーとしてサッカーをプレーしていたが小学生にサッカーを教える立場になったことで新たな視点でサッカーというスポーツの良さを実感できた。また、海外サッカーリーグを鑑賞する機会が増え、そこで活躍する日本人選手やワールドカップで日本代表が欧州の強豪国の勝利する姿を見て、ここ数年での日本人選手の能力の飛躍は凄まじいと感じた。そこで私は、今後日本サッカーが海外サッカーを追い抜くために必要なことを考察することにした。自分の実体験をもとに育成年代と呼ばれる層に着目をし本論文を描き進めていくことにする。

2. 日本と海外サッカーの背景

日本サッカーが海外サッカーに追いついてきたとはいえど埋めることのできない差というものは存在する。

1つ目は歴史である。イングランドのサッカーリーグ発足が1888年に対し、日本のJリーグ発足が1991年と約100年ほど遅れをとってしまっている。小さな島国でゼロからサッカーを普及していくのにはそれほどの期間が必要であったと言える。

2つ目はサッカー市場の大きさである。選手には市場価値というものが一人ひとりに設けられ、それが一つの指標になっている。トップの海外選手の市場価値が数百億円に対し、国内の日本人選手が数億円と100分の1にも満たない状況にある。サッカーの歴史上、仕方がないように感じることもできるだろうが、ここ数年サウジアラビアでは、国内のリーグに全盛期を終えたビッグプレーヤーを呼び込むことでサッカー市場の急成長を見せた。

3つ目は環境である。私自身も小学生からサッカーを始め、これまで何不自由なくのびのびとサッカーをプレーしてこられました。道具や施設がきちんと完備された環境が当たり前だと認識していた。しかし、海外では、貧富の差や紛争地域などでまともにサッカーをプレーすることができない環境も多い。その中から世界で活躍するビッグプレーヤーが誕生している。クロアチア代表のルカモドリッチ選手は、少年時代に紛争難民を経験している。体格も非常に小さく生き抜くのに必死で娯楽やスポーツなんてものは選択肢に上がることさえないだろう。そんな彼が今では世界最高峰のクラブのエースナンバーを背負ってプレーをし

ている。そういった逆境を乗り越える力が乏しい日本と海外。これも埋めることのできない差と言えるだろう。 これらを踏まえ、日本がその他の分野で海外との差を埋めていけるが最も重要なことである。

3. 予備調査

今回、私は日本と海外の育成年代を比較する上で、「育成年代サッカーに関する実態調査ー日本とドイツのトレーニング内容の比較からー」という文献の中で行われたアンケート調査を私自身が行き、アンケート結果を比較する。育成年代とは小・中・高・大学生から 20 歳までと幅広く指す言葉であるため、今回の調査では小学生のアンケート結果と高校生のアンケート結果を用意することとする。文献内の研究内容と結果は以下のもの。

<調査内容>

日本やドイツにおいてクラブチームに所属する育成年代サッカー選手に調査の目的などを簡潔に説明し、アンケート調査を行った。

<調査項目>

サッカーを始めた動機、練習時間、練習回数、チーム以外での練習、練習の楽しさ、サッカーでの目標、サッカーの観戦に関するもの。

<調査対象>

大阪府茨木市内の日本のクラブチームに所属する 28 人の育成年代選手と、ドイツケルン市内のクラブに所属する 23 人の育成年代選手。

<調査期間>

日本では 2021 年 10 月 30 日、ドイツでは、2022 年 8 月 29 日の 1 日間実施した。

<結果>

表 1. 日本育成年代選手とドイツ育成年代選手との比較

指標	日本 (n=28)	ドイツ (n=16)	t値	Cohen's d
サッカーを始めた動機	3.39 ± 0.83	2.88 ± 1.50	1.27 ns.	1.12
練習回数(1週間)	5.11 ± 1.50	3.63 ± 1.86	3.04 *	1.28
チーム以外での練習回数(1週間)	5.11 ± 0.79	2.38 ± 1.02	1.73 ns.	0.96
練習時間(1回の練習)	93.21 ± 27.80	87.50 ± 28.81	0.65 ns.	28.16
練習の楽しさ	1.39 ± 0.69	2.06 ± 1.18	-2.08 *	0.89
サッカーでの目標	4.18 ± 1.22	2.88 ± 1.82	2.56 *	1.46
サッカーの観戦	2.71 ± 0.98	1.94 ± 0.44	3.61 *	0.83

*:p<.05, ns:not significant

その結果、練習回数、練習の楽しさ、サッカーでの目標、サッカー観戦では、ドイツ育成年代選手群は、日本育成年代選手群と比較して 4 項目が有意に高い値を示した。

練習回数の比較：「練習回数」に関しては、ドイツ育成年代選手は、平均値 3.63 回と 3~4 回程度であった。それに対して、日本育成年代選手は平均値 5.11 回と 5~6 回程度で

あった。このことから、日本育 成年代選手は 5~6 回程度であったことから、練習回数による検討することが望まれる。

練習の楽しさ：「練習の楽しさ」に関しては、ドイツ育成年代選手は、平均値 2.06 と「楽しくないときもある」の回答が多かった。それに対して、日本育成年代選手は平均値 1.39 と「いつも楽しい」の回答が多かった。このことから、日本とドイツの練習環境による強化方針の違いによって生じたと考えられる。

サッカーの目標：「サッカーの目標」に関しては、ドイツ育成年代選手は、平均値 2.88 と「国内クラブのサッカー選手になること」から「リーグ戦トーナメントで優勝すること」の回答であった。それに対して、日本育成年代選手は平均値が 4.18 と「チームでレギュラーになること」の回答が多かった。このことから、日本は限られたクラブ、サッカーそのもの楽しさを見出す部活動などが存在する中で、まず「チームでレギュラーになること」であった。一方、ドイツは、日本の数倍もあるクラブチームに所属し、より多くのクラブチームで高いレベルでプレーしたいという考えのもと「国内クラブのサッカー選手になること」から「リーグ戦トーナメントで優勝すること」の回答が多かったと考えられる。

サッカー観戦：「サッカーの観戦」に関しては、ドイツ育成年代選手は、平均値 1.94 と「よく競技場へ見に行く」から「テレビの試合はよく見る」の回答であった。それに対して、日本育成年代選手は平均値が 2.71 と「テレビの試合はよく見る」から「ときどきテレビの試合を観る」の回答であった。このことから、ドイツは「よく競技場へ見に行く」から「テレビの試合はよく見る」に対して、日本は、「テレビの試合はよく見る」から「ときどきテレビの試合を観る」の回答であった。ドイツは「サッカー文化やスポーツ文化の土台が整っている」、「スタジアムに来場するための動機づけ」、「スタジアムに足を運ぶのを阻害要因の排除」などの要因が重なったためだと考えられる。

4. 調査方法

<調査内容>

日本の育成年代サッカー選手に調査の目的などを簡潔に説明し、アンケート調査を行った。

<調査項目>サッカーを始めた動機、練習時間、練習回数、チーム以外での練習、練習の楽しさ、サッカーでの目標、サッカーの観戦に関するもの。

<質問項目>

(1) サッカーを始めた動機

(1 両親にすすめられて、2 先生やコーチにすすめられて、3 兄弟や友達がしていたから、4 サッカーが楽しそうだから、5 サッカー選手達がかっこいいから)

(2) 練習時間について(1 回の練習時間)

(1.30 分, 2.45 分, 3.1 時間, 4.1 時間 15 分, 5.1 時間 30 分, 6.1 時間 45 分, 7.2 時間以上)

(3)練習回数について(回/週)

(1.1 回, 2.2 回, 3.3 回, 4.4 回, 5.5 回, 6.6 回, 7.7 回)

(4)チーム以外での練習回数(1 週間)

(1 いつもよくしている, 2 よくしている, 3 ときどきしている, 4 あまりしない)

(5)練習の楽しさ (1 いつも楽しい, 2 楽しくないときもある, 3 ときどき楽しい, 4 あまり楽しくない)

(6)サッカーでの目標

(1 海外のプロサッカー選手になること, 2 国内クラブのサッカー選手になること, 3 リーグ戦トーナメントで優勝すること, 4 チームでレギュラーになること, 5 友達と仲良くサッカーができればいい, 6 その他)

(7)サッカーの観戦

(1 よく競技場へ見に行く, 2 テレビの試合はよく見る, 3 ときどきテレビの試合を見る, 4 ほとんど見ない)

<調査対象>東京都小平市内のサッカーチームに所属する小学6年生(15人)の育成年代選手と、東京都東久留米市内の部活動に所属する高校3年生(20人)の育成年代選手。

<調査期間>小学生は2023年10月8日、高校生は2023年11月26日

5. 結果

小学6年生(15人)

(1)サッカーを始めた動機→平均値 3.6

(2)練習時間について(1回の練習時間)→平均値 7

(3)練習回数について(回/週)→平均値 2.6回

(4)チーム以外での練習回数(1週間)→平均値 3.1

(5)練習の楽しさ→平均値 1.1

(6)サッカーでの目標→平均値 2.8

(7)サッカーの観戦→平均値 2.2

練習時間は同じチームのため回答がほぼ一致していた。練習の楽しさについては「いつも楽しい」という回答がほぼ占めていた。サッカーでの目標においても「国内クラブのサッカー選手」の回答が多くあった。

高校3年生(20人)

(1)サッカーを始めた動機→平均値 3.5

(2)練習時間について(1回の練習時間)→平均値 7

(3)練習回数について(回/週)→平均値 6

(4)チーム以外での練習回数(1週間)→平均値 3.2

(5)練習の楽しさ→平均値 1.5

(6)サッカーでの目標→平均値 3

(7)サッカーの観戦→平均値 2.6

練習時間と練習回数は同じチームのため回答が一致していた。練習の楽しさにおいては「いつも楽しい」と「楽しくないときもある」という回答が二極化した。サッカーの目標においては「リーグ戦トーナメントで優勝すること」という回答が多くあった。

6. 結果の比較

簡潔に小学生と高校生の結果の比較を行う。サッカーを始めた動機については「兄弟や友達がしていたから」「サッカーが楽しそうだから」という回答が大半であった。練習回数については小学生が 2.6 回に対し、高校生は 6 回と倍以上の日数の差があった。サッカーでの目標については多くの小学生が「プロサッカー選手を目指している」のに対し、高校生は「リーグ戦やトーナメントで優勝すること」と目標については大きな違いが生まれた。成長するにつれ目標が小さくなり、現実的になったと言えるだろう。

次に日本の高校生をこの調査の育成年代だと仮定し、ドイツの育成年代選手の比較を行う。

練習回数についてドイツの育成年代選手は平均で週に 3~4 回練習を行っているのに対し、日本の育成年代の選手は週に約 6 回ほど練習を行なっている。これは参考文献の研究と同じような結果となった。

練習の楽しさについてはドイツ育成年代選手の選手は「楽しくないときもある」と回答する割合が高かった。一方、日本の育成年代選手は「いつも楽しい」「楽しくないときもある」と回答が二極化した。互いに「楽しくないときもある」と感じる選手がいたことからこれは参考文献の研究と同じ結果とはならなかった。

サッカーの目標についてはドイツの育成年代選手は国内クラブのサッカー選手になることからリーグ戦トーナメントで優勝することという回答に対し、日本の育成年代選手もリーグ戦やトーナメントでの優勝という回答が大半であった。プロサッカー選手を目指すほどの選手は少ないが互いに同じ目標を掲げていることがわかる。これも参考文献の研究と同じ結果とはならなかった。

サッカーの観戦に関しては、ドイツの育成年代の選手は競技場まで試合を見に行くことからテレビで試合を観戦するという回答に対し、日本の育成年代選手は主にテレビで試合を観戦する傾向にあった。これは参考文献の研究と同じ結果となった。

7. 考察

練習回数については明確な違いが視えたが、これには日本の独特の文化が関係していると考えられる。それが部活動である。日本の部活動のような学校で放課後や休日に教員の指導の下で課外活動を行うことは日本独特の文化といえる。これにより日本の育成年代選手らの練習回数は増えてしまっている。しかし、日本にも海外のようにプロクラブチームの下部組織が存在する。日本の育成年代選手にとっては、大きく 2 つの選択肢があるといえる。部活動

とクラブユースにはどのような違いがあるのか。

「自分の中学時代と高校時代を一概に比べることはできないけど、サッカーの環境や知識に関してはクラブのほうが整っていたと思う。中学生の自分に対してコーチはサッカーを教えるプロで、立派な人工芝でレベルの高いトレーニングができた。

部活動は土のグラウンドの整備やボールなど用具の準備から始まる。指導者も監督やコーチである以前に『先生』だった。自分の場合、佐熊監督でも佐熊コーチでもなく『佐熊先生』。高校生にとって先生は怖い存在がほとんど（苦笑）。自分は佐熊先生に具体的な指示や指摘を受けた記憶はあまりないけど、昔の生徒は先生が怖いから毎日を頑張る。それによって心身ともに鍛えられる部分はあったと思う」

学校が終わり、決められた時間と場所でサッカー教育を受けるのがクラブ。専門的な知識を手に入れることができるというメリットはたしかに存在するだろう。対して部活動は学校生活の一部に過ぎない。授業をはじめとしたサッカー以外の時間のほうが長い。部活の顧問は先生であると同時に、親のような存在かもしれない。人格形成により大きな影響を与える環境になるのは自然な流れだろう。」

元プロサッカー選手の中村俊輔選手のインタビュー記事より一部抜粋したものである。部活動とクラブチームどちらにも良し悪しがあるが日本も海外のように部活動を廃止し、クラブチームだけで育成を行なって行けば良いのだろうか。私はその意見には反対である。部活動とクラブチームの2つの軸があるからこそ日本の育成年代が活性化されると考えます。昨年行われたカタールワールドカップでの日本代表メンバー26名のうち高校時代に高校サッカー部出身の選手は12名、クラブユース出身は14名であった。人数的にもそこまで大差はない。クロアチア戦でのPK戦でゴールを決めた選手は高体連出身の選手であった。また、高校生年代には高円宮杯プレミアリーグと高体連やクラブユースが混合で行うリーグ戦がある。

順位表

順位	チーム名	勝点	試合数	勝	分	負	得点	失点	得失点差
1	青森山田高校(青森県)	51	22	16	3	3	54	25	+29
2	尚志高校(福島県)	49	22	15	4	3	46	20	+26
3	川崎フロンターレU-18(神奈川県)	46	22	14	4	4	57	17	+40
4	柏レイソルU-18(千葉県)	36	22	10	6	6	50	30	+20
5	市立船橋高校(千葉県)	34	22	8	10	4	34	28	+6
6	流通経済大学付属柏高校(千葉県)	27	22	7	6	9	30	29	+1
7	昌平高校(埼玉県)	26	22	7	5	10	30	34	-4
8	前橋育英高校(群馬県)	26	22	8	2	12	28	41	-13
9	大宮アルディージャU18(埼玉県)	23	22	6	5	11	22	35	-13
10	FC東京U-18(東京都)	22	22	5	7	10	26	36	-10
11	横浜F・マリノスユース(神奈川県)	17	22	4	5	13	26	42	-16
12	旭川実業高校(北海道)	10	22	3	1	18	17	83	-66

※ ■プレミアファイナル出場 ■プリンスリーグ自動降格圏内

これはそのリーグの昨年の順位表である。過半数以上が高体連で構成されており、日本の

育成年代において欠かせない存在であることは間違いない。よって練習回数の増加そのものは改善する必要はないと考える。

練習の楽しさについては日本とドイツの育成年代選手どちらも「楽しくないときもある」と回答があったが、日本の強豪校でのレギュラー争いなどとドイツの厳しい環境は同等の強度があるため、同じような回答であったと考えられる。JFAの指導ガイドラインでは、サッカーの楽しさを伝えることが重要視されているが、小学生の回答では「いつも楽しい」といった回答が大半を占めていたのでガイドライン自体は問題なくクリアできているだろう。

サッカーの目標については日本とドイツの育成年代選手どちらもリーグ戦やトーナメントでの優勝が目標と同じ回答であったが、ドイツの育成年代選手に比べ日本の育成年代選手はプロサッカー選手を目指す回答が少なかった。それにはサッカーを始めた動機が深く関係していると考えられる。「サッカー選手達がかっこいいから」という回答がなかったようにサッカーを普及させることにお向きを向け過ぎてしまっており、楽しさだけが伝わってしまい最終的な目標を設定させることができていないのではないかと考える。指導者の力量もとても重要になってくる。

サッカー観戦に関して、ドイツの育成年代選手は競技場まで試合を観に行くのに対し、日本の育成年代選手は主にテレビで試合を見る傾向がある。ドイツにはサッカー文化やスポーツ文化の土台が整っていることや、スタジアムに来場するための動機が明確に存在する。日本ではクラブより代表の方が人気があると感じる。海外ではクラブの方が人気が高い傾向にある。これは国内リーグが完全に成熟する前に、代表が海外と戦えるレベルに到達してしまったためだと考えられる。

8. 結論

上記の考察を踏まえた上で、今後日本が育成年代の成長に欠かせない要素として、「クラブユースの強化」「指導者の養成」「Jリーグの発展」の3つを挙げる。

クラブユースの強化に関して、上記の考察でも述べているが、プロサッカー選手に直結しているのがクラブユースである。クラブユースの方が部活動よりも強いチームでなくてはならない。そのためにはスカウティングが必要である。日本のクラブでは、選考方法としてセレクションを用いているクラブがほとんどである。セレクションとはチームに所属するために行う入団テストのようなものだ。この選考方法のデメリットとして、まず、入団テストを受けに来てくれた選手しか獲得ができないことである。次に、短期間で行われるセレクションは選手の実力を判断しきれない場合がある。コンディションによって本領を発揮しきれずに終わってしまう有望な選手が存在する。一方、海外でのスカウティングは、長期間にわたり各国にスカウトマンを派遣している。サッカー選手の寿命は短く、中学生になるまでに技術的な部分は固まってしまうと言われている。海外は、将来の投資に労力を割いており、サッカーをビジネス的な面で捉えている。クラブユースを強化するために、まずスカウティングを主流にし、全国から有望な選手を集めるべきではないかと考える。

指導者に関して、大事なことは年代にあわせた指導をしっかりと行うことである。私が小学生にサッカーを教える身として1番意識していることは、「サッカーの楽しさ」である。発育発達を考慮し、技術よりも頭や心の成長が小学生には必要なことだと考える。全体像を把握し、次の指導者にバトンを渡すように、それぞれの年代に適した育成を携わる指導者全員が意識しなくてはならない。また、質の高い育成には指導者の日々の指導のレベルが高くなくてはならない。最終的には質の高い指導者がいなくてはならないのも事実の1つではある。

Jリーグの発展に関して、Jリーグが発足してから約30年ほどが経ちましたが、急速に成長をしていったため現在は停滞期を迎えているように感じる。日本サッカー協会技術委員会では、日本がファーストランクの国々と対等に戦う力をつけるためには何をすれば良いかという目標を掲げています。このことから日本代表の強化を優先していることがわかる。そのため、国内リーグが完全に成熟する前に世界と互角に渡り合えるようになってしまった。それが現在、国内リーグが停滞してしまっている要因である。私自身、Jリーグのサッカー観戦に行った回数は片手で数えられる程度である。サブスクリプションを活用し、海外のリーグをインターネットで視聴するのがほとんどであった。Jリーグは視聴していて物足りなさを感じるのが正直な感想である。若手の有望な選手も自身のキャリアを考え、海外リーグに所属するためJリーグに魅力的な選手が集まりづらい。そして、アンケート調査の結果でもわかる通り、日本は現地に試合を観戦しに行く習慣が根付いていない。試合という商品を買ってもらうためには質の高いものを提供しなくてはならない。そのために、マーケットを再構築していく必要がある。世界に追いつくためには、海外の全盛期を終えたビッグプレイヤー達を積極的に呼び込むべきである。日本の若手の有望選手をインバウンドとするなら、海外の全盛期を終えた名選手をアウトバウンドとし、試合の質を高めていくべきである。注目を集めることができれば、現地に観にいく人々も増えてインパクトを残せれるのではないだろうか。そこでクラブのその他の選手を知るきっかけにもなることだろう。今後は、積極的に投資を行い、ファン層を増やしていくべきである。

9. 謝辞

今回、本論文の作成にあたり、アンケート調査を快く引き受けていただいた小学校のコーチ陣、高校の先生方、そしてアンケートにお答えいただいた選手達には感謝しております。ありがとうございました。

参考文献：育成年代サッカー選手に関する実態調査—日本とドイツのトレーニング内容の比較から— 2023年3月22日,第17号,8394 松山博明、須田芳正、福士徳文、杉崎達哉、中野大輔、二宮博

<https://www.i-repository.net/contents/outemon/ir/402/402230304.pdf#search=%22%22>

引用元：THE ANSWER スポーツ文化・育成&総合ニュースサイト 「ユースと部活、どっちが育つのか」 中村選手が考える、日本サッカー積年の疑問 2019年2月25日

<https://the-ans.jp/course/52892/>

日本サッカー協会ホームページ

https://www.jfa.jp/youth_development/